

## 啄木の聞いた盛岡の音の風景

### —『閑天地』と『葬列』を通して—

黒 澤 勉

(岩手医科大学 教養部 文学)

#### 一、耳の詩人啄木

日曜日の朝の、NHK第二ラジオ放送に「音の風景<sup>(注一)</sup>」という番組がある。日本各地の山や川の音、小鳥達のさえずり、木々のざわめきといった自然のかもしれない音、またそれぞれの土地、生活の場に生きる人々の語りあう声などを録音し、それに解説をくわえた番組で、短いながら詩情あふれる番組である。

私達が自然の景観や人間の営みを美しいもの、心魅かれるものとして享受するのは、その目に見える姿だけではなく、耳から入ってくる音や皮膚を刺激する触感、匂いなど様々な感覚を通してである。わけても聴覚は、視覚以上に原始的、根源的<sup>(注二)</sup>であり、耳の鋭いことは音楽家の条件というだけでなく、文学者、詩人にあっても欠くことのできない条件といえるのかもしれない。

「耳の鋭い」と簡単に言ってしまったが、それは物理的な聴覚の問題でなく、音を心で感じとるその感受性の問題でもある。音を詩情あるものとして豊かに深く感じ取る能力、それは受身の能力であるが、同時に音を生み出す—音楽や文学作品を生み出す創造的な力ともなる。

啄木は幼少期に深い静けさの中で育った。人口千人足らずの洪民村<sup>(注三)</sup>にあった曹洞宗、宝徳寺。カエルやセミの鳴き声、モズ、ムク鳥、ヨシキ

リ、キジ、ウグイス、ヒバリ、ヒワ、カッコウの鳴き声、キツツキの木を啄む音、虫の音、風のそよぎ、木々のざわめき、父の唱える読経の声や木魚の音は、深い静けさと共にあった。満九歳(明治二十八年)にして盛岡に遊学、やがて盛岡中学で文学に熱中、明治三十五年退学、上京に至るまで自由奔放にして豊かな青春を送る。盛岡は当時人口「三万五千<sup>(注四)</sup>」の市としては「劣弱」な、それだけに静かな町であった。その中で思う存分、詩歌に親しんだことによって、多感な心が育てられていく。

大都会のような、絶えざる騒音の中にあつて人の耳は退化しがちである。強力な刺激的な音でなければ、反応しなくなる。ベートーベンが難聴で苦しんだ時、医師は静かな環境で暮らすことを勧めた。そこでベートーベンはウィーン郊外のハイリゲンシュタットに身を移して静養に努めた、といわれる。また、その地で「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれ、死を思うほどの苦しみを乗り越えて「田園交響楽」の楽想を得たともいわれている。

啄木晩年の故郷への深い思慕は、大都会の喧騒の中に生きることのできなかった詩人の心の叫びでもあった。それは、静けさに安らぎを見出す心に発するものであり、啄木自身の生い立ちと結びついているように思われるのである。

故郷—啄木にとって故郷とは洪民村（第一の故郷）であり、盛岡（第二の故郷）である。ここでは啄木が、盛岡の静けさの中で、どのような音を聞き、それをどのように表現しているか、『閑天地』と『葬列』を取り上げて考察してみたい。

## 二、『閑天地』—中津川の瀬音

『閑天地』は明治三十八年（満十九歳）六月から七月にかけて、計二十一回にわたって『岩手日報』に断続的に連載された随想である。「永く都塵に埋もれて、旦暮身世の匆忙に追はれ、意ならずして故郷の風色にそむくうちに、身は塵臭に染み、吟心また勞れをおぼえ」た—すなわち、大都会の世間的なあわただしさに追われ、故郷の诗情あふれる風景から遠ざかっているうちに、俗臭に埋もれ、詩心を失っていった啄木が、「閑天地を求めて」久しぶりに帰った「なつかしき故山」である盛岡の詩友に、己が心境を語る、という設定でこの作品は書かれている。この記述でわかるように「閑天地」「故山」の発見は、「都塵」（東京における世間的な汚れ）にまみれ「身世の匆忙」（身すぎのあわただしさ）を経験したことによるものだった。

そこで『閑天地』執筆に至るまで、上京から帰省に至るまでの生活史的背景について簡単にまとめておく。啄木は明治三十七年十月末、洪民村を発って上京した。処女詩集『あこがれ』の出版費用を捻出するためであったといわれる。翌年六月上旬、仙台を経て盛岡へ帰り堀合節子と結婚。市内帷子小路に新居を定めた。新居は旧南部藩士の屋敷で、こじんまりとした作りながら庭もある落ち着いた家であった。しかし、そこにわずか三週間ほど暮しただけで、六月二十五日、中津川湖畔の加賀野積町に転居、翌年三月四日まで、そこで過ごした。

一方、啄木が新婚生活を始める直前、父一禎が宗費滞納のため曹洞宗宗務院より住職罷免の処分を受け、三月二日、宝徳寺を退いて、同じ洪民の芋田に移転、四月二十五日には盛岡の帷子小路に移っている。つま

り、啄木の新婚生活は、石川一族が洪民を去って盛岡に転住した、その家で始められたということになる。また盛岡女学校に通う妹の光子も同居、「家長」としての啄木の負担は大きかった。「夢見る詩人」に突如ふりかかってきた厳しい生活の現実。啄木はそのような現実を韜晦するような筆使いで、「このたびの我が旅、故郷の閑古鳥聴かんがためとも人に云ひぬ。塵ばみたる都の若葉、忙しさも限りもなき陋巷の住居に倦み果てても云ひぬ」と『閑天地』に記している。現実には節子との結婚のため、家族の養育のための帰省ではあったが、閑古鳥（カッコー）の声を聞くため（丁度、閑古鳥の鳴く季節である）狭苦しい多忙な東京の生活に倦きて帰省したというのである。啄木一流の文学的虚勢ではあるが、ここには見逃せない真実もある。

それは盛岡（そして洪民）—故郷が岩手山・姫神山でも北上川でもなく、「閑古鳥」の鳴く静かな土地だということである。「閑天地」という言葉は世間的な煩わしい生活から切り離された、静かな心のゆとりのある所という意味である。その「天地」とは具体的にいえば、啄木一家の暮らす借家であり、その借家を囲む盛岡である。それは小さいながら、大都会の喧騒きわまりのない「塵臭」を離れた、詩歌の生まれる所であった。「閑天地」という言葉には「閑吟」とか「閑雅」「閑居」などという古い時代の、古典的な詩歌のイメージも揺曳している。

『閑天地』を注意して読むと、耳の詩人、啄木の好む音が散りばめられていることがわかる。たとえば、はしがきの「風鈴に和して吟じ、雨声を友として語り、この夏中、百日を暢心静居の界に遊ばんとす」という一節。盛岡は古くから南部鉄の産地であり、それが鉄瓶や風鈴に加工されている。風鈴の音はどこでも聞かれるものであるが、啄木が愛着をもつて聴いたのは、その南部風鈴の音色であった。さらに、また「雨声」。啄木にとって雨は「声」として感受され、しみじみと落ち着いて語りあえるものであった。

これに加えて、新居には「古鉄瓶に松風の楽」—古鉄瓶の沸騰してた

ぎる音があり、節子「秘蔵のヴァイオリン」の音色があった。そのヴァイオリンは啄木が東京で手に入れた新妻へのプレゼントであった。

盛岡の音のなかでも、なかんづく、加賀野に移った啄木の心を捉えたものは、中津川の水音である。中津川は現在のそれより、はるかに水量が多く、しばしば洪水による氾濫もあり、岸边には、その洪水から守られるように川留稲荷神社も建てられている。啄木一家の借家は、その中津川から二十メートルほどの近くにあって、中津川の瀬音が夜の静けさのうちに聞こえてきた。『閑天地』には「我は昨日、その四畳半を去つて、一家と共にこの中津川の水の音涼しくも終夜枕にひびく新居に移りぬ。かの室にて、日毎に心耳を澄まして聞くをえしヴァイオリンは、この新居にても亦聞きえざるにあらず」と記されている。中津川の瀬音に交って聞いたヴァイオリンの音色は、貧困と病を生きる啄木の心の支えでもあったろう。

「病と貧」とは『閑天地』の一つのテーマともなっている。貧困は「現世の不幸」とどまるものであり、「現世を超越する者」とっては「何の痛痒」も感じさせるものではなく、それどころか貧困こそ「天才を護育する揺籃」だと記しているが病についても（記述はないが）同じように考えていたのであろう。啄木はこの頃、病にも苦しんでいた。ここには病と貧の逆境にあつてなおかつ、高い誇りをもって強く生きぬこうとする意志が輝いている。以後、啄木の人生には貧困と病の二つの不幸が深い影を落とし、それが同時にまた、啄木文学を育てていくことともなる。それにしても、盛岡で書かれた『閑天地』と、東京で書かれた『ローマ字日記』あるいは『明治四十三年日記』は、何と違っていることか。『閑天地』には詩人たるの誇りがあり、希望があり、明るさがある。しかし後者にはそれがない。

盛岡の生活の明るさは、一つには結婚生活の始まりであったこと、心おきなく語りあえる詩友がいたことなどにも支えられているが、その自然環境―音としての環境が、啄木に深い慰め、慰藉をもたらしたからで

はなかるうか。

『明星』の三十八年七月号には啄木・せつ子の署名のもとに「涼月集」と題された十首が発表されている、その中の一首。

中津川や月に河鹿の啼く夜なり涼風追ひぬ夢見る人と（啄木）

新妻、節子と共に歩いた中津川の夜、ここでもまたカジカガエルの鳴き声が印象的である。残念ながら、今それを聞くことはできない。（近くに住む人の話では、昭和二十年代ごろまで、その鳴き声が聞こえたり、ホタルも沢山いて家の中にまで入ってきたという）

『閑天地』最終回の「陰曆水無月の十一夜」「月いと美しき夜」、小林花京の提案で岡山残紅、節子、妹の光子、啄木の五人で歌会をもつたのは、生涯で最も幸福な、盛岡の一時であったろう。啄木はそれを次のように記している。

「中津川の水高減りたる此頃、木の間伝ひの水の声たえだえなれど、程近き水車の響、秋めいたる虫の音を織りまぜて、灯影ほのめく庭の紫陽花の風情の云ひがたきなど、珍らしく心地すぐれたる夜なりき」瀬音から水の減ったことを感じとる啄木の耳は鋭い。また、かつてこの近くに水車があつたことなど、今の盛岡では信じられないほどである。中津川の瀬音、ギーギーと回る水車の音、コオロギやキリギリスの鳴く声、それらが渾然と一体になり、灯に照らされた紫陽花ともあわせて、詩情あふれる一夜であった。啄木はこの時、一切の生活の煩いから解放され、心ゆくまで盛岡の詩情を味わっていた。

### 三、「葬列」―「みちのくの平安城」の蕭やかな音

啄木は盛岡での十ヶ月にわたる新婚生活（明治三十八年六月四日から翌年三月三日まで）の後、故郷の洪民村に一家転住した。岩手日報社からの原稿料など、わずかばかりの収入はあつたものの、勤め口をもたないため経済的に行き詰まり、これを打開するため、何としても父の住職罷免を取り消してもらって、一家の経済的安定をはかるうとした。幸い、

父は曹洞宗務局より特赦されたので、宝徳寺再住を要請した。ところがそれは、代務住職を擁する一派と父を推す一派とに、檀家間の分裂、対立をもたらすことになった。結果として追放派の圧力に耐えかねて父は家族に告げることなく家出をした(明治四十年三月五日)。

啄木はこの間、母校の洪民尋常小学校代用教員となり、教職に情熱を燃やした。しかし、啄木の頭の中にあつたのは、教師として生活をまっとうさせようという思いではなく、文学者として自立したいという思いであつた。『あこがれ』によって詩人としての高い評価は得たものの、その実生活は困難をさわめていた。文学者としての夢を実現させつつ、経済的な自立をはかる、そのためにはどうしても、小説を書く必要があつた。藤村の『破戒』(明治二十九年三月)、漱石の『坊ちゃん』(同四月)などに刺激を受けて『雲は天才である』や『面影』を書いた。しかし、これらの小説は発表されることがなかった。

啄木が小説家として初めて自らの作品を発表したのは、三十九年十一月『明星』においてである。『葬列』という短編であつた。この『葬列』を通して「盛岡の音」を考えてみよう。

『葬列』の主人公、立花浩一は二十幾年前に盛岡から十数マイル隔てたある寒村に生まれ、その地の尋常科を最優秀で卒業、盛岡の高等小学校、中学校で学んだ。そして十八歳の時、一度故郷に帰って十幾ヶ月を過ごした後、東京に出て歴史家の書生となり、文部省の検定試験を受けて歴史の教員の免状をもらった。その後、厨川柵を中心とした安倍氏について調査する必要があつて五年ぶりに盛岡に帰ってきた、という設定のもとに、前半では、久しぶりに訪れた盛岡の印象を描き、後半では狂人のお夏と繁の姿が描かれ、それについての感想が述べられている。

ここには、前節において述べた啄木の経歴や実際の見聞が反映している。「なつかしい過去の追想」の多くは「この中津河畔の美しい市を舞台」にしており、盛岡は「実に自分の第二の故郷なんだ。『美しい追想の都』なんだ」という立花の思いは、そのまま、啄木の実感であろう。『葬

列』のモチーフ(今一つのモチーフは、狂人、繁とお夏についての啄木の感慨である)は、この「第二の故郷」である盛岡の「なつかしさ」にあり、それは啄木の歩みに即していえば、約七ヶ月に及ぶ東京での生活を経て帰省した時の感慨であろう。

「なつかしい」という言葉は「なつく」(馴れ親しむ)の形容詞で、古くは「心が魅かれて離れたくないさま、愛着を覚えるさま、慕わしい」ことをいうが、中世以降になって「過去の思い出に心が魅かれて慕わしいさま、離れている人や物に覚える慕情についていう」ようになった(『日本国語大辞典』)。啄木は、後に自らの過去、少年時代をなつかしみ、故郷をなつかしんで、数々の名歌を残すことになるが、『葬列』にみられる「なつかしさ」は、直接には、かつて暮らした青春の土地に戻って、その地に触れて親しく感じた「なつかしさ」である。しかし、この小説を書いている時のことを思えば、洪民にあって、盛岡を「なつかしく」恋しく思い出している啄木の心が、その裏に潜在しているようにも思われる。

啄木は『葬列』の中で、盛岡を「誰が見ても美しい日本の都会」だと言い、「東北の京都」というより「みちのくの平安城」と呼びたいと記している。この古風な呼び方の中に、啄木の盛岡に対する思いが凝縮している。それは奥床しい情緒、伝統と近代とが凝縮した安らぎの土地である。

啄木は盛岡のイメージを伝えるのに、音によって表現している。それは啄木の感性が捉えた盛岡の「昔の風景」と呼んでもいいものである。

『閑天地』において、啄木は好んで夜の中津川の音、あるいは「雨音」を取り上げていたが、ここでも盛岡の最も気に入っている時は、「夜」だといひ、天候では「雨」、四季では「秋」だといひ。そしてこの三つを統合した「雨の降る秋の夜」の盛岡が最も好きだ、ということになるが、「それでは完全に過ぎて、余り淋し過ぎる」といひ。啄木は、夜の静寂を愛し、秋の長雨(盛岡は九月に最も雨が長く梅雨時のように長雨の続

くことも少なくない。その後(に晴れの十月が来るのである)の寂しい音を愛した。そこに何ともいえぬセンチメントを感じ、胸ふたぐ思いがした。それを「奈何して此三が一緒に三足揃った完全な鍋、重くて黒くて冷たくて堅い雨ふる秋の夜といふ大きい鍋を頭から被る辛さ、切なさを忍ぶことが出来やう」とまで記している。

しかし、その後(に描かれているのは、盛岡の夜ではない。その反対に、午時近く(な)って聞こえてきた豆腐売りの声、十二時を報ずるステーションの工場の汽笛、四家町の教会の鐘、そして理髮床における盛岡弁の会話である。

まず、豆腐売りの「低い、呑気な、永く尾を引張る」「豆腐ア」という声について、啄木はそれこそ「不幸にも全五年の間忘れ切つて居た『盛岡の声』ではないか」という。「豆腐売りの『低い、呑気な、尾を引張る』声には『雨の盛岡』に通う蕭やかさを感じ、安らぎを見出した。

盛岡にはかつて、豆腐売り、納豆売り、花売り、菓売りなど様々な物売りが、節回りよろしく、美しい声で売り歩いていた。それは洪民のような村ではそれほど見られないものであつたらう。中学時代、盛岡で生活している時は、意識することもなかつたし、上京中に思い出すことさえなかつた、その「盛岡の声」が久しぶりで帰省した立花の―啄木の心を捉えて、えもいえぬ「なつかしさ」を感じたのである。

さらに、十二時を報ずるステーションの工場の汽笛。これは盛岡駅に隣接する国鉄盛岡工場の昼休みを告げる音である。これまた「シツポリ濡れた様な唸り」をあげる。ここにも雨に通うイメージがある。

続いて、四家町の教会の鐘(現在のカトリック四家教会の鐘である)。これは「アンジェラの鐘」と呼ばれ、明治三十三年、デレンヌ神父の時代にフランスから贈られたもので、今日に至るまで、市民に親しまれている。その鐘をつくのは西洋人神父で、宮澤賢治の短歌にも詠まれている。その鐘が「ガランガラン鳴り出」すと、それにすぐ続いて「不来方の城畔」の梵鐘が鳴る。「幾百年来、同じ鯨音を陸奥の天に響かせて居る

巨鐘の声」が「十二の数を撞き終る」と「今迄あるかなきかに聞えて居た市民三万の活動の響が、礎と許り」止む。(この鐘は「時鐘」と呼ばれていた)前者が西洋文化の象徴とすれば、後者は藩政時代から時を告げてきた城下町盛岡の象徴である。

そして最後に、盛岡弁である。即ち「理髮床」における「剃手」と「銀杏髻」の「十七八の娘」(客)の会話は次のように描かれる。

女「アノナハーン、アエツダケアガナハーン、昨日スアレー、彼ノ人アナーハン」

男「フンフン、御前ハンモ行タケスカ。フン、真ニソダチナハン。

アレガラナハン、家サ来ルツギモ面白ガタンチエ。ホリヤホリヤ、大変ダタアンステア」

(女「あのね、いつだったかねー。昨日ねえあの人がねえー」

男「ふんふん、あなたも行つたんですか。ふん、本当にそうだって

いますね。あれからね、家に来る時も面白かつたですよ。ホ

レホレ、大変だったんですよ」

啄木はこの会話の後に「此奇怪なる二人の問答には、少なくとも三幕物に書き下すに足る演劇的事実が含まれている」とし、そこに「深い深い意味」と「誠に優美な調子」とを聞きとっている。「奇怪なる」という言い方の中には、東京弁を聞き慣れた者の感懐がこめられており、東京弁とは全く異質の、この盛岡弁に深い味わい、奥床しい情緒、盛岡のその「蕭やかな空気」「雨音」にも通うような響きを感じとつたのである。この理髮床における会話は、洪民のような村の方言と違って、やさしく丁寧であり、また上品でもある。城下町盛岡は様々な身分の人が住み、商業も発達していただけに、在郷(盛岡弁で「ジェゴ」という)に比べ、敬語が発達し、言葉遣いも奥床しかった。「ナハーン」という言葉が繰り返されているが、今でもこの「ナハーン」を盛岡らしい、優美なやさしい言葉として好きだという人も多い。残しておきたい盛岡弁として、よく取り上げられるのもこの「ナハーン」である。

以上のように、『葬列』には「みちのくの平安城」の「蕭やか」にして「優美」、「悠長」にして奥床しい様々な音の風景が描かれている。それらの音は、今洪民にあって小説を書き続けている啄木の耳に残響のように響き続けていたに違いない。

(注一) 日曜日の朝七時二十五分から五分間の番組。

(注二) 人間の感覚として最初に目覚めるのは聴覚で、すでに胎児の時から音を聞くとはいわれ、目が開いて見えるようになる前に、まず耳が聞こえている。亡くなる時は逆に一番最後まで聴覚が残るといふ。言葉もその本質は音であり、音を視覚に移したのが文字であって、決してその逆でない。

(注三) 洪民村は盛岡から奥州街道を下った最初の宿場で、明治十七年(一八八四)以降の洪民駅地割図では街道を中心に家数一一六があり、町場が形成され「洪民町」とも「枯杉かれすぎ」とも呼ばれた。  
〔岩手県の地名〕平凡社

(注四) 明治三十八年十月十八日付、川上賢三宛書簡に「全国中、市としての盛岡の地位は甚だ劣弱なるべく候、人口は三万五千、電燈は恰度一ヶ月前より初めてこの市を照したるばかりに候」とある。

(注五) 『石川啄木事典』の年譜による推定。

(注六) 明治三十六年五月二十二日付、金田一京助宛書簡に「ふる里の閑古鳥聴かむと俄かに都門をのがれ来て、一昨夕よりこの広瀬川の岸に枕せる夢の様なる思に耽り居候」とある。

(注七) (注四)と同じ書簡に「東北の史を案ずれば、南部馬と鉄瓶と金と鉄との名産地たる南部藩(南部の中心は申す迄もなく盛岡に候)は」とある。

(注八) 昭和三十八年八月三十日、新渡戸仙岳宛書簡に「アノ翌日より、小生腸胃を病み痔にくるしみ、就褥ここに九日万事の手筈大に

喰ひ違ひ申候」同九月十三日付川上賢三宛書簡に「男一疋、身長五尺三寸あり、雑誌の一つや二つに閉口も致さず候へども、先月も下旬より、二週間許り下痢と痔と胃痛、頭痛にて就序」などの記述で健康すぐれなかったことがわかる。

(注九) 現在、啄木一家の暮らした加賀野積町の借家近くにある富士見橋に次の歌碑が建っている。

岩手山秋はふもとの三方の野に満つる虫を何と聴くらむ  
啄木の「明治四十四年当用日記」の補遺に、前年一年間の記事として「八月より九月にかけて、東京及び、各地に大水害あり。盛岡加賀野町の旧居流失せるを聞く」とある。

(注一〇) 明治三十八年七月十三日付、蒲原隼雄(有明)宛書簡に「水車の音枕にひびく南の窓の甘き夢」の一節がある。

(注一一) 明治三十八年六月付、伊東圭一郎宛書簡に「この中津川の川音封じ込む一書、恐らく兄は意外としたまふらむ」の一節がある。

(注一二) さはやかに／朝のいのりの鐘鳴れと／ながひて過ぎぬ／君が教会(大正五年)などの作品がある。

#### 参考文献

- 『石川啄木事典』おうふう  
『石川啄木の世界』遊座昭吾 八重岳書房  
『岩手福音宣教百年史』上田哲・ホールレンシユタイン編著  
岩手カトリック宣教再開百年祭実行委員会刊  
「盛岡の啄木碑」森義真 盛岡タイムス

(受付 二〇〇三年一〇月一七日)

(くろさわ・つとむ)